

「内視鏡外科用語集」

日本内視鏡外科学会用語委員会 編集

日本赤十字社和歌山医療センター院長

吉 田 修

気腹して内視鏡で腹腔内を観察しようという試みは、1901年 Kelling がイヌの腹腔に空気を入れ、膀胱鏡を用いて腹腔内を観察したことにさかのぼる。しかし、この手法はヒトに用いられるには至らず、臨床的に応用されるまでにはかなりの年月を要した。内視鏡外科が今日のように発達するためには、内視鏡の改良とビデオシステムの応用、更にはトロカーをはじめ各種鉗子などの装備と器具の開発が必要であったからである。したがって腹腔鏡下手術がわが国に導入されたのは比較的近年のことであり、10年以上は経っていない。にもかかわらず内視鏡外科学の進歩は目覚ましく、腹部外科にとどまらず、産婦人科、胸部外科、泌尿器科、整形外科、形成外科などに拡がり、既にそれぞれの領域で minimally invasive surgery の1つとして定着したと言っても過言ではない。

このような時代の流れの中で、日本内視鏡外科学会が設立されたの

は必然であると言えるが、多くの専門分野を包含した新しい横断的領域ができると、用語の統一が優先的に必要になってくる。当初は laparoscopic surgery を腹腔鏡手術と呼び、腹腔鏡下手術とは言わなかった。なぜなら腹腔鏡下手術は、読み方によっては下手術になるなどという他愛のない声も聞こえた。日本内視鏡外科学会では、新しい横断的領域には共通した言葉が必要であるとの認識のもとに各科領域から委員を選出し用語委員会を発足させ、「内視鏡外科用語集」の作成を開始したわけである。

本用語集は 1. 手術手技用語、2. 手術器具用語、3. 手術所見記載に必要な用語、4. 手術診断に必要な用語、5. 手術に必要な解剖用語、に分類されており、邦語をまず挙げ、その英語を併記する形式をとり、和文索引と英文索引を付け加えた 244 頁のハンディな著書である。更に誤解されやすい用語や混乱の恐れのある用語や複数の訳語のある用語には

注をつけて説明している。この注釈は懇切丁寧で(特に解剖用語)、本書を単に“用語を調べる”ためのものだけでなく“読む”ものにまで高めている。内視鏡外科の進歩は多岐にわたり、急速である。それに伴い新しい用語も必要になってくる。また例えば minimally invasive surgery のように適当な日本語が決まらないままの用語もある。この委員会の継続的な活動をお願いしたい。

領域の異なる専門家が集まり、このように迅速に立派な用語集を完成されたことに對し、山川達郎委員長を初め委員各位に心から敬意と謝意を表したい。

本用語集は内視鏡外科に携わっている人々の座右にあり、日常の診療で正しい用語が使われるのに大きな役割を果たし、また和文および英文の論文を書く際にも非常に有用であると考え、広く推薦したい。

● B 6 頁 256 図 1 表 3 1999
定価(本体 3,500 円 + 税) 円 400